

病害虫発生予察予報第4号（8月の予報）

佐賀県

目次

1. 8月の病害虫	1
2. 気象概要	2
3. 予報の内容・根拠等について	2
4. 8月の予報	
<u>普通作物</u> （水稻）	3
<u>果樹</u> （カンキツ、ナシ、ブドウ、果樹全般）	15
<u>茶</u>	25
<u>野菜</u> （イチゴ、アスパラガス）	29
5. <u>全国・佐賀県で多発生している病害虫及び新たに発生した病害虫</u>	33
6. <u>農薬の適正使用について</u>	34

今月のトピックス

気温が高い8月は、害虫が増殖しやすい時期です。圃場での発生状況を確認して、適期防除に努めましょう（トラップ等のデータは、農業技術防除センターのホームページを参照して下さい）。

1. 8月の病害虫（予報で対象とした病害虫の中から抜粋）



水稻の葉いもち（矢印が病斑）



イチゴ炭疽病による葉の斑点症状



ナシヒメシンクイ（上：幼虫、下：成虫）



チャのチャノコカクモンハマキ

連絡先：佐賀県農業技術防除センター 病害虫防除部
〒840 - 2205 佐賀市川副町南里1088
TEL (0952) 45 - 8153 FAX (0952) 45 - 5085

2. 気象概要

【3ヶ月予報 平成27年7月24日 福岡管区気象台発表】
8月 平年と同様に晴れの日が多いでしょう。

各病害虫の「予報の根拠」として、上記の向こう1か月の気象予報からみた病害虫の発生条件を必要に応じて記載しています。

上記の気象予報（確率予報）の内容について、本文中では便宜上、「気温並」、「降水量並」と簡略的に表現しています。

8月の要素別確率(%)

要素	低い(少ない)	平年並	高い(多い)
気温	30	40	30
降水量	30	30	40

【参考】

要素	平年値 (佐賀市)	平年差(比)の平年並の範囲 (九州北部地方)
8月の平均気温	27.8℃	-0.3℃ ~ +0.4℃
8月の降水量	196.9mm	65% ~ 110%

3. 予報の内容・根拠等について

病害虫の発生量（平年比）

○予報の発生量は平年（佐賀県の過去10年間）及び参考として前年との比較で、「少、やや少、並、やや多、多」の5段階で示しています。

○留意点として、平年値との比較であるため、平年値が低い病害虫は、「平年より多い」場合でも見かけの発生は多くないことがあります。一方、発生が毎年目立ち、平年値が高い病害虫は、「平年並」や「平年よりやや少ない」場合でも見かけ上は多いと感ずることがあります。

予報の根拠

○予報の根拠には、巡回調査、防除員の調査、予察灯・トラップでの誘殺状況調査等に基づく発生状況、気象予報からみた病害虫の発生条件を必要に応じて記載しています。

○それぞれの条件は、少発生（－）、やや少発生（－～±）、並発生（±）、やや多発生（±～＋）、多発生（＋）として示し、＋－を総合的に判断して発生量を予想しています。

写真

○1ページ目には、予報で対象とした病害虫の写真を抜粋して掲載しています。

○3ページ目以降には、巡回調査時の各作物の生育状況の写真を掲載しています。

4. 8月の予報

普通作物

【概要】

作物名	病虫害名	発生量		病虫害防除のてびきの記載ページ	備考
		平年比	前年比		
早期水稲 (上場地域)	紋枯病	並	並	152～154	
	斑点米カメムシ類	やや少	並	175～178 195～197	
山間早植え 水稲	穂いもち	多	並	145～151	平成27年7月23日付病虫害発生予察注意報第5号 参照
	紋枯病	並	並	152～154	
	トビイロウンカ	並	やや多	161～165	平成27年7月24日付病虫害対策資料第11号 参照
	コブノメイガ	並	やや多	171～173	
	斑点米カメムシ類	やや少	並	175～178 195～197	
普通期水稲	穂いもち	多	やや少	145～151	平成27年7月23日付病虫害発生予察注意報第5号 参照
	紋枯病	並	並	152～154	
	白葉枯病	並	並	151～152	
	もみ枯細菌病	並	並	155～157	
	トビイロウンカ	並	やや多	161～165	平成27年7月24日付病虫害対策資料第11号 参照
	コブノメイガ	やや少	やや多	171～173	
	フタオビコヤガ	やや少	並	180～181	
	斑点米カメムシ類	やや少	並	175～178 195～197	

【特記事項】

1. 葉いもちの発生がみられる圃場では、穂ばらみの防除を徹底する。なお、進展型病斑がみられる圃場では早急に防除を行う（[平成27年7月23日付病虫害発生予察注意報第5号](#)参照）。
2. 近年、トビイロウンカが多発生傾向にあることから、必ず圃場における発生状況を確認した上で、適期に防除を徹底する。なお、薬剤は株元にむらなくかかるよう十分量を丁寧に散布する。
3. 近年、稲こうじ病が多発生傾向にある。本病の防除については、水和剤・粉剤を使用する場合には出穂20～10日前に、粒剤の場合は出穂30～20日前を中心に処理する。
4. 薬剤散布は、周辺環境に十分配慮し行う。特に、ミツバチの被害を回避するため、養蜂農家に農薬の散布時期や散布時間等を予め伝達するなどの対応を取る。

水稻（早期、上場地域）

（巡回調査日：7月21日）



巡回調査時の生育状況

1. 紋枯病

1) 予報の内容

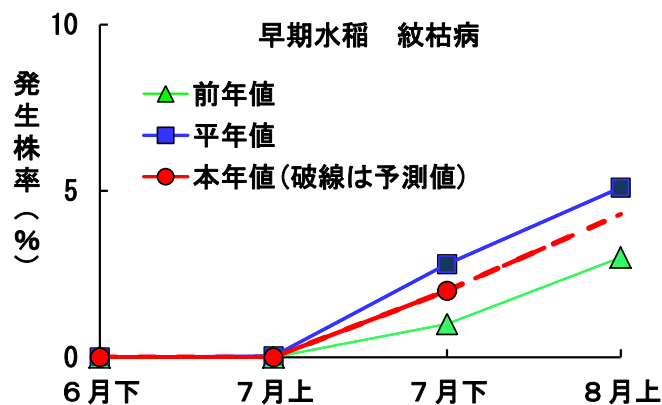
発生量：**平年並**（前年並）

2) 予報の根拠

- (1)巡回調査では、発生株率は2.0%（平年2.8%、前年1.0%）であり、平年及び前年並である。〈±〉
- (2)気象予報では、並発生の条件となっている。〈±〉

3) 防除上注意すべき事項

- (1)本病の発生状況は圃場によって異なるので、各圃場での発生状況を確認し、病斑が上位3葉の葉鞘に達している場合は直ちに防除を行う。



2. 斑点米カメムシ類

水稻（早植え）の斑点米カメムシ類の項参照。

水稻（山間早植え）

（巡回調査日：7月22日）



巡回調査時の生育状況

1. 穂いもち

1) 予報の内容

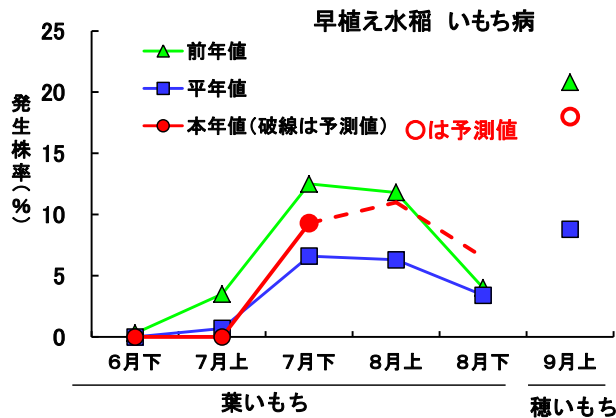
発生量：**平年より多い**（前年並）

2) 予報の根拠

- (1)巡回調査では、葉いもちの発生株率9.3%（平年6.6%、前年12.5%）であり、平年よりやや多く、多発生した前年よりやや少ない。〈±～+〉
- (2)巡回調査圃場以外でずり込みを起こすなど多発生している圃場が一部で見られる。〈±～+〉
- (3)気象予報では、並発生の条件となっている。〈±〉

3) 防除上注意すべき事項

- (1) [平成27年7月23日付病害虫発生予察注意報第5号](#)参照。
- (2)葉いもちの発生がみられる圃場では、穂ばらみ期の防除を徹底する。多発生が予想される場合には穂揃い期にも防除を行う。



2. 紋枯病

1) 予報の内容

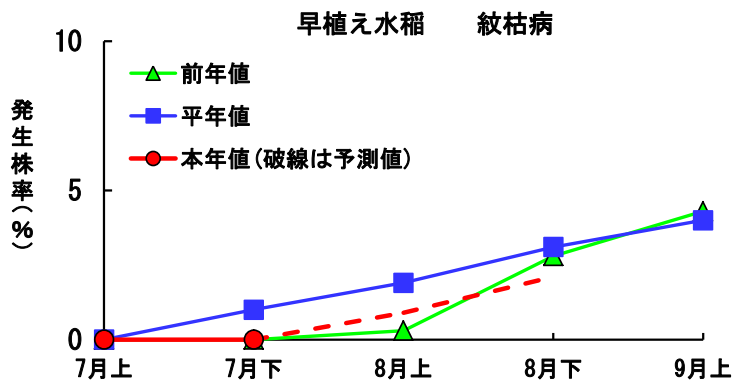
発生量：平年並（前年並）

2) 予報の根拠

- (1) 巡回調査では、発生を認めていない（平年1.0%、前年0.0%）。〈±〉
- (2) 気象予報では、並発生の条件となっている。〈±〉

3) 防除上注意すべき事項

- (1) 本病の発生が見られる圃場では、病斑が上位葉の葉鞘に進展する前に防除を行う。



3. トビイロウンカ

1) 予報の内容

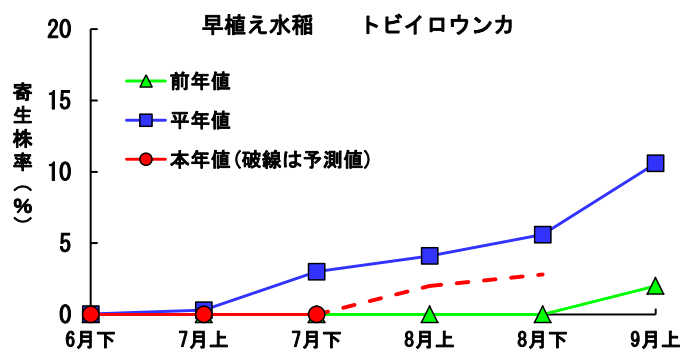
発生量：平年並（前年よりやや多い）

2) 予報の根拠

- (1) トビイロウンカの飛来は6月30日頃、7月13日頃と7月22日頃にみられ、飛来量は平年並である（P. 12の表4）。〈±〉
- (2) 巡回調査では、寄生を認めていない（寄生株率：平年3.0%、前年0%）。〈±〉
- (3) 気象予報では、並発生の条件となっている。〈±〉

3) 防除上注意すべき事項

- (1) 発生予想パターン図（P. 13の図2）を参考にして、必ず圃場における発生状況を調査し、幼虫ふ化揃い期（防除適期）に防除を徹底する。
- (2) 本虫は株元に生息しているため、薬剤は株元にむらなくかかるように、十分量を丁寧に散布する。



4. コブノメイガ

1) 予報の内容

発生量：平年並（前年よりやや多い）

2) 予報の根拠

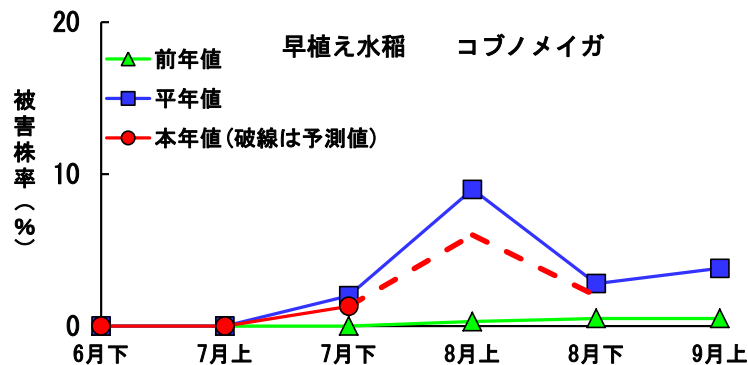
(1)コブノメイガの飛来は6月17日頃にみられ、飛来量は平年よりやや少ない(P. 12の表 4)。〈-~±〉

(2)巡回調査では、被害株率1.3%（平年2.0%、前年0%）であり、平年並で前年よりやや多い。〈±〉

(3)気象予報では、並発生の条件となっている。〈±〉

3) 防除上注意すべき事項

(1)発生予想パターン図(P. 14の図 3)を参考にして、必ず圃場における発生状況を確認し、発蛾最盛期の7日後（幼虫ふ化揃い期）に防除を実施する。



水稻（早期・早植え・普通期）

1. 斑点米カメムシ類 (クモヘリカメムシ、ホソハリカメムシ、シラホシカメムシ類、

アカスジカスミカメ、ミナミアオカメムシ等)

1) 予報の内容

発生量：平年よりやや少ない（前年並）

2) 予報の根拠

(1)水田隣接のイネ科植物での捕虫網によるすくい取り調査（7月17~24日）では、カメムシ類の発生は平年よりやや少なく前年並である（表 1）。〈-~±〉

(2)気象予報では、並発生の条件となっている。〈±〉

3) 防除上注意すべき事項

(1)水田周辺の雑草地（畦畔、休耕田、空き地等）は斑点米カメムシ類の増殖・被害源となるので、除草を徹底する。なお、水稻の出穂直前に除草すると斑点米カメムシ類が水田内に移動することになるので、除草は水稻の出穂10日前までに行う。

(2)カメムシ類の生息数は地域ごとに異なるので、すくい取り調査や見取り調査を行い、防除要否（穂揃い期~乳熟期に、圃場内で20回すくい取りで5頭以上いる場合は防除を実施）を判断する。

(3)少発生の場合は乳熟期（穂揃い期の約10日後）を中心に防除を行う。多発生時は穂揃い期とその7~10日後に防除を行う。

表1 斑点米の原因となるカメムシ類のイネ科植物におけるすくい取り調査結果

20回すくい取り虫数(平成27年7月21~24日)

調査地点	場所	草種	クモヘリカメムシ		ホソハリカメムシ		シラホシカメムシ類		アサジカスミカメ		ミナミアカメムシ
			成虫	幼虫	成虫	幼虫	成虫	幼虫	成虫	幼虫	成虫
佐賀市本庄町	道端	エノコグサ類	1	0	0	0	0	2	2	0	0
佐賀市川副町	空き地	エノコグサ類	3	0	0	0	0	0	41	6	0
佐賀市西与賀町	道端	エノコグサ類	0	0	0	0	0	0	1	1	0
唐津市肥前町	道端	エノコグサ類	1	1	0	0	0	0	0	0	0
小城市芦刈町	空き地	エノコグサ類	8	0	1	0	0	0	18	8	0
神崎市神埼町	道端	エノコグサ類	1	0	0	0	0	0	11	6	0
神崎市千代田町	空き地	エノコグサ類	0	0	0	0	0	0	3	2	0
嬉野市塩田町	空き地	エノコグサ類	4	11	0	0	0	0	4	3	0
白石町①	道端	エノコグサ類	0	1	2	1	0	0	1	6	0
白石町②	道端	エノコグサ類	0	0	0	0	0	0	3	2	0
吉野ヶ里町	空き地	エノコグサ類	3	0	0	0	0	0	1	0	0
みやき町	空き地	エノコグサ類	0	0	0	0	0	1	12	5	0
平均(本年)			1.8	1.1	0.3	0.1	0.0	0.3	8.1	3.3	0
前年			1.5	2.7	0.6	0.1	0.2	0.4	15.0	13.5	0.1
平年(過去10年の平均)			4.1	7.4	1.7	0.9	0.5	1.1	20.8	11.4	0.03

水稻(普通期水稻)

(巡回調査日: 7月21~22日)



巡回調査時の生育状況

1. 穂いもち

1) 予報の内容

発生量: 平年より多い(前年よりやや少ない)

2) 予報の根拠

- (1)巡回調査では、葉いもちの発生株率10.6%(平年0.9%、前年0.4%)であり、平年及び前年より多い。〈+〉
- (2)BLASTAMで、葉いもちの感染好適条件が7月6日と7月20日に複数地点で出現し、これまでの出現回数は平年よりやや多い(P. 11の表3、図1)。〈±~+〉
- (3)気象予報では、並発生の条件となっている。〈±〉

3) 防除上注意すべき事項

- (1)平成27年7月23日付病害虫発生予察注意報第5号参照。
- (2)葉いもちの進展型病斑(写真1)がみられる圃場では早急に防除を行う。
- (3)葉いもちの発生がみられる圃場では、穂ばらみ期の防除を徹底する。多発生が予想される場合には穂揃い期にも防除を行う。

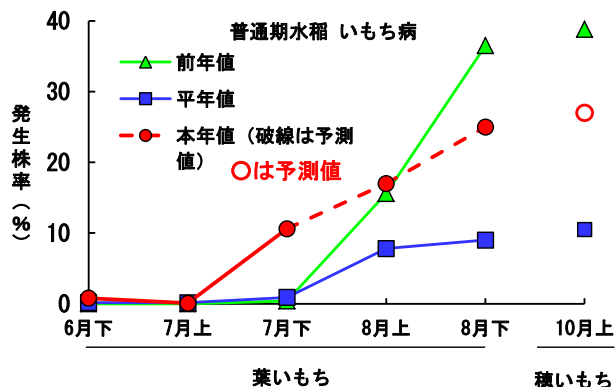


写真1 葉いもちの進展型病斑
円形ないし楕円形で、中央が灰白色、周縁が紫黒色となる。

2. 紋枯病

1) 予報の内容

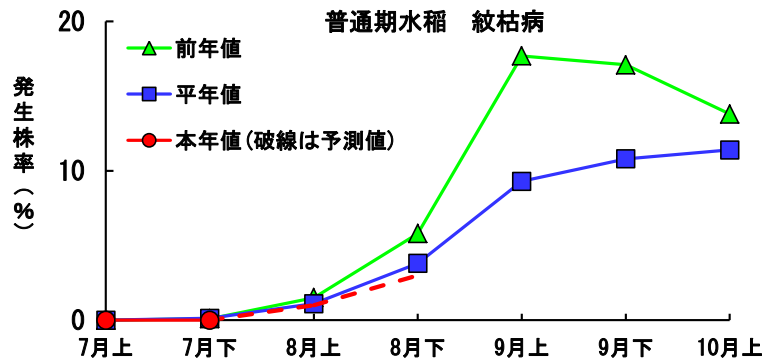
発生量：平年並（前年並）

2) 予報の根拠

- (1)巡回調査では、発生を認めていない（平年0.1%、前年0.1%）。〈±〉
- (2)気象予報では、並発生の条件となっている。〈±〉

3) 防除上注意すべき事項

- (1)本病が発生している圃場では、病斑が上位葉の葉鞘に進展する時期（液剤、粉剤の場合出穂10～20日前を目安とする）に防除を行う。



3. 白葉枯病

1) 予報の内容

発生量：平年並（前年並）

2) 予報の根拠

- (1)巡回調査では、発生を認めていない（平年0%、前年0%）。〈±〉
- (2)気象予報では、並発生の条件となっている。〈±〉

3) 防除上注意すべき事項

- (1)台風等の強風雨後には多発生するので注意する。

4. もみ枯細菌病

1) 予報の内容

発生量：平年並（前年並）

2) 予報の根拠

- (1)気象予報では、並発生の条件となっている。〈±〉

3) 防除上注意すべき事項

- (1)気象予報に留意し、開花期間中に降雨が予想される場合は、出穂前後3日の間にスターナ剤による防除を行う。

5. トビイロウンカ

1) 予報の内容

発生量：平年並（前年よりやや多い）

2) 予報の根拠

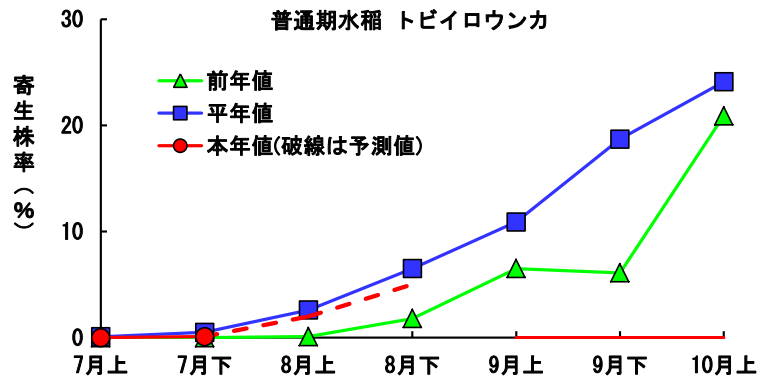
- (1)トビイロウンカの飛来は6月30日頃、7月13日頃と7月22日頃にみられ、飛来量は平年並である（P.12の表4）。〈±〉
- (2)巡回調査では、寄生株率は0.1%（平年0.5%、前年0.1%）であり、平年及び前年並である。〈±〉
- (3)気象予報では、並発生の条件となっている。〈±〉

3) 防除上注意すべき事項

- (1)発生予想パターン図（P.13の図2）を参考にして、必ず圃場における発生状況を調査し、

幼虫ふ化揃い期（防除適期）に防除を徹底する。

(2) 本虫は株元に生息しているため、薬剤は株元にむらなくかかるように、十分量を丁寧に散布する。



6. コブノメイガ

1) 予報の内容

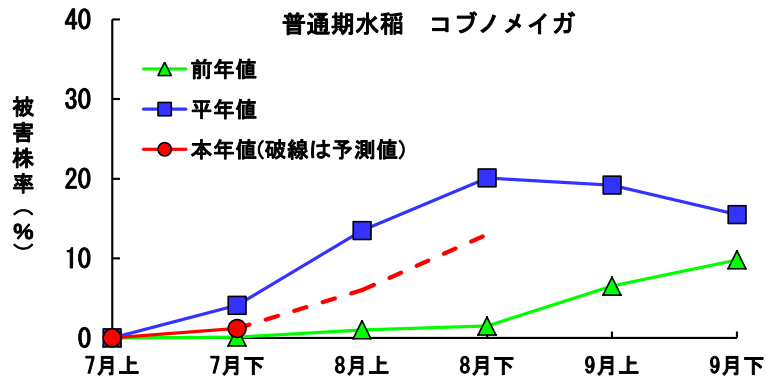
発生量：平年よりやや少ない（前年よりやや多い）

2) 予報の根拠

- (1) コブノメイガの飛来は6月17日頃にみられ、飛来量は平年よりやや少ない(P. 12の表 4)。〈-~±〉
- (2) 巡回調査では、被害株率は1.2%（平年4.1%、前年0.1%）であり、平年よりやや少なく前年並である。〈-~±〉
- (3) 気象予報では、並発生の条件となっている。〈±〉

3) 防除上注意すべき事項

- (1) 発生予想パターン図(P. 14の図 3)を参考にして、必ず圃場における発生状況を確認し、発蛾最盛期の7日後（幼虫ふ化揃い期）に防除を実施する。



7. フタオビコヤガ(イネアオムシ)

1) 予報の内容

発生量：平年よりやや少ない（前年並）

2) 予報の根拠

- (1) 本年の予察灯及びフェロモントラップにおける誘殺数は、平年よりやや少なく前年並に推移している（表 2）〈-~±〉
- (2) 気象予報では、並発生の条件となっている。〈±〉

3) 防除上注意すべき事項

- (1) 8月中~下旬頃に圃場における発生状況を確認し、必要に応じて防除を実施する。

表2 フタオビコヤガのトラップ誘殺状況(佐賀市川副町, 農業試験研究センター調査)

月	半旬	予察灯			フェロモントラップ		
		平成 26年	平年	前年	平成 26年	平年	前年
		頭	頭	頭	頭	頭	頭
6月	1	1	2	0	15	40	9
	2	1	2	0	11	40	11
	3	0	2	0	3	28	11
	4	0	1	0	1	12	3
	5	0	0.2	0	0	4	2
	6	0	1	0	3	7	1
7月	1	1	1	0	5	13	1
	2	1	3	0	7	18	2
	3	0	5	0	4	12	3
	4	1	5	0	1	19	2
	5		23	1		42	0
	6		35	3		108	3
8月	1		35	2		91	11
	2		116	8		169	38
	3		144	10		305	55
	4		150	15		288	159
	5		99	48		222	71
	6		67	17		221	144
9月	1		33	20		118	176
	2		21	10		75	186

注) 予察灯の平年値は、平成17年～26年の平均。

フェロモントラップの平年値は、平成17年～26年の平均。

8. 斑点米カメムシ類

水稻（早植え）の斑点米カメムシ類の項参照。

表3 BLASTAMによる葉いもちの感染好適条件の出現状況

月日	佐賀県						福岡県			長崎県	
	唐津	伊万里	佐賀	嬉野	白石	川副	前原	太宰府	久留米	松浦	佐世保
7月1日	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
2日	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
3日	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
4日	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
5日	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10
6日	—	—	10	10	—	—	—	—	—	—	10
7日	4	10	—	4	—	—	10	4	—	4	—
8日	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
9日	10	—	—	—	—	—	—	—	—	—	3
10日	3	—	—	3	—	—	3	—	—	—	—
11日	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
12日	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
13日	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
14日	—	—	—	—	—	—	—	3	—	—	—
15日	—	—	—	—	—	—	—	?	—	—	—
16日	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
17日	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
18日	—	—	—	—	—	—	4	4	—	—	—
19日	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
20日	10	10	—	—	3	—	—	—	—	—	—
21日	—	—	—	—	—	—	—	10	—	—	—
22日	—	10	—	—	—	—	3	—	3	3	—
23日	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—

- 注) 1 : 準好適条件 (前5日間の平均気温は20℃未満だが、湿潤が10時間以上)
 2 : 準好適条件 (前5日間の平均気温は25℃を越えているが、湿潤が10時間以上)
 3 : 準好適条件 (湿潤期間中の平均気温は15~25℃でないが、湿潤が10時間以上)
 4 : 準好適条件 (湿潤期間中の気温は比較的低いが、湿潤が10時間以上)
 10 : 好適条件 (湿潤時間が長く気温も適当で、葉いもちの感染好適条件が出現した)
 — : 好適あるいは準好適条件の出現なし
 ? : 判定不能

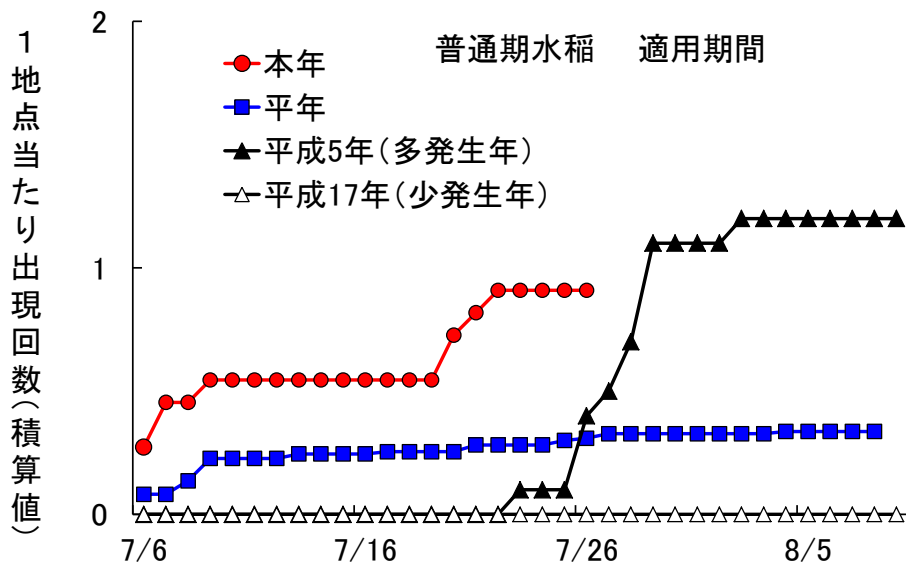


図1 BLASTAMによる感染好適条件の出現延回数
 (6月16日移植の場合: 適用期間7月6日~8月9日)

表4 ウンカ類とコブノメイガの誘殺状況(平成27年)

月	日	トビイロウンカ				セジロウンカ				コブノメイガ						
		佐賀県		長崎県		佐賀県		長崎県		佐賀県				長崎県		
		佐賀市	嬉野市	諫早市	諫早市	佐賀市	嬉野市	諫早市	諫早市	佐賀市	伊万里市	白石町	嬉野市	諫早市	諫早市	
		ネット トラップ	ライト トラップ	ライト トラップ	ネット トラップ	ネット トラップ	ライト トラップ	ライト トラップ	ライト トラップ	ネット トラップ	フェロモン トラップ	粘着トラップ (20W蛍光灯)	粘着トラップ (20W蛍光灯)	粘着トラップ (20W蛍光灯)	粘着トラップ (20W蛍光灯)	フェロモン トラップA
6月	1日	0	0	欠測	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	2日	0	0	欠測	0	0	0	0	0	36	0	0	0	0	0	0
	3日	0	0	欠測	0	0	3	0	欠測	25	5	0	0	0	0	0
	4日	0	0	欠測	0	0	0	0	欠測	4	0	0	0	0	1	0
	5日	0	0	欠測	0	0	2	0	欠測	0	0	0	0	0	0	0
	6日	0	0	欠測	0	0	0	0	欠測	2	2	0	0	0	0	0
	7日	0	0	欠測	0	0	1	0	欠測	9	1	0	0	0	1	0
	8日	0	0	0	0	0	0	0	1	33	0	0	0	0	1	0
	9日	0	0	0	0	0	0	0	0	47	1	0	0	0	0	0
	10日	0	0	0	0	0	0	0	8	9	0	0	0	0	0	0
	11日	0	0	0	0	0	1	0	1	83	0	0	0	0	0	0
	12日	0	0	0	0	0	16	0	0	10	0	0	0	0	5	0
	13日	0	0	0	0	0	0	0	10	6	0	0	0	0	3	0
	14日	0	0	0	0	0	0	0	0	14	0	0	0	0	6	2
	15日	0	0	0	0	0	0	0	1	51	0	0	0	0	7	0
	16日	0	0	0	0	0	0	0	0	2	0	0	0	0	7	0
	17日	0	0	0	0	0	0	0	0	8	0	0	0	1	1	0
	18日	0	0	0	0	0	0	0	1	36	0	0	0	0	1	0
	19日	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	1	0
	20日	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	1	0
	21日	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2	1
	22日	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	1	0
	23日	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0
	24日	0	0	0	0	0	0	0	1	2	0	0	0	0	0	0
	25日	0	0	0	0	0	0	0	1	4	0	0	0	0	0	0
	26日	0	0	0	0	0	0	3	2	5	0	0	0	0	2	2
	27日	0	0	0	0	0	0	0	2	7	0	0	0	0	4	4
	28日	0	0	0	0	0	0	0	0	1	2	0	0	0	1	1
	29日	0	0	0	0	0	0	0	0	2	0	0	0	0	3	0
	30日	0	0	0	0	欠測	14	0	2	94	欠測	0	0	0	0	1
7月	1日	0	0	0	1	0	0	0	0	102	0	0	0	0	0	5
	2日	0	0	0	0	0	0	0	2	82	0	0	0	0	0	5
	3日	0	0	0	0	0	0	0	0	42	0	0	0	0	0	2
	4日	0	0	0	0	0	0	0	1	9	0	0	0	0	2	7
	5日	0	0	0	0	0	0	0	1	10	0	0	0	0	0	2
	6日	0	0	0	0	0	0	0	9	12	0	0	0	0	0	0
	7日	0	0	0	0	0	0	0	5	11	0	0	0	0	0	0
	8日	0	0	0	0	0	0	0	1	6	0	0	0	0	0	0
	9日	0	0	0	0	0	0	0	0	4	0	0	0	0	0	0
	10日	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0
	11日	0	0	0	0	0	0	0	1	1	0	0	0	0	0	3
	12日	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	13日	0	0	1	0	0	0	0	20	31	0	0	0	0	1	1
	14日	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0
	15日	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	3
	16日	欠測	0	0	0	欠測	0	0	0	0	2	欠測	0	0	0	5
	17日	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	3
	18日	0	0	0	0	0	0	0	0	3	0	0	0	0	0	2
	19日	0	欠測	0	0	0	欠測	1	0	0	0	0	0	0	0	0
	20日	0	欠測	0	0	0	欠測	7	0	0	0	0	0	0	0	0
	21日	0	0	0	0	0	0	2	8	0	0	0	0	0	0	3
	22日	0	0	1	0	0	0	0	4	1	0	0	0	0	0	0
	23日	0	0	1	0	0	0	3	0	0	0	0	0	0	0	1
	24日	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	25日	欠測	0	0	0	欠測	1	0	1	0	0	0	欠測	0	0	1
	26日	欠測	0	0	欠測	欠測	0	0	60	欠測	0	欠測	0	0	0	0
	27日	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0

注1) ウンカ類: 佐賀市のトラップは農業試験研究センター調査。嬉野市のトラップは農業技術防除センター調査。

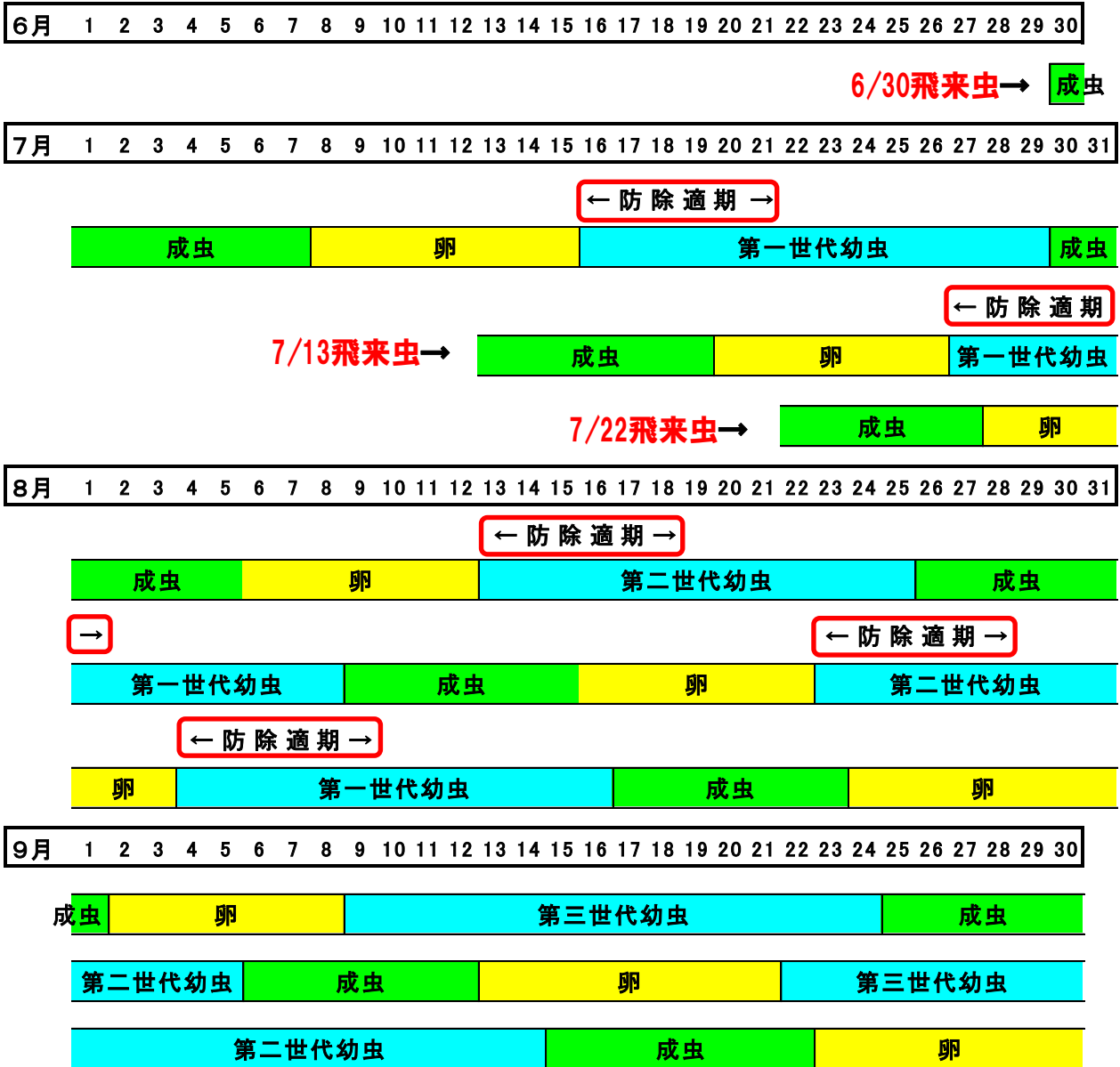
注2) コブノメイガ: 神崎市、白石町、伊万里市、嬉野市は各調査員が調査。

佐賀市の粘着トラップは農業試験研究センター、フェロモントラップ(6月9日設置)は農業技術防除センターで調査。

長崎県のデータは、長崎県病害虫防除所提供。

図2 トビイロウンカの発生予想パターン 第2版

(平成27年7月24日、佐賀県農業技術防除センター作成)

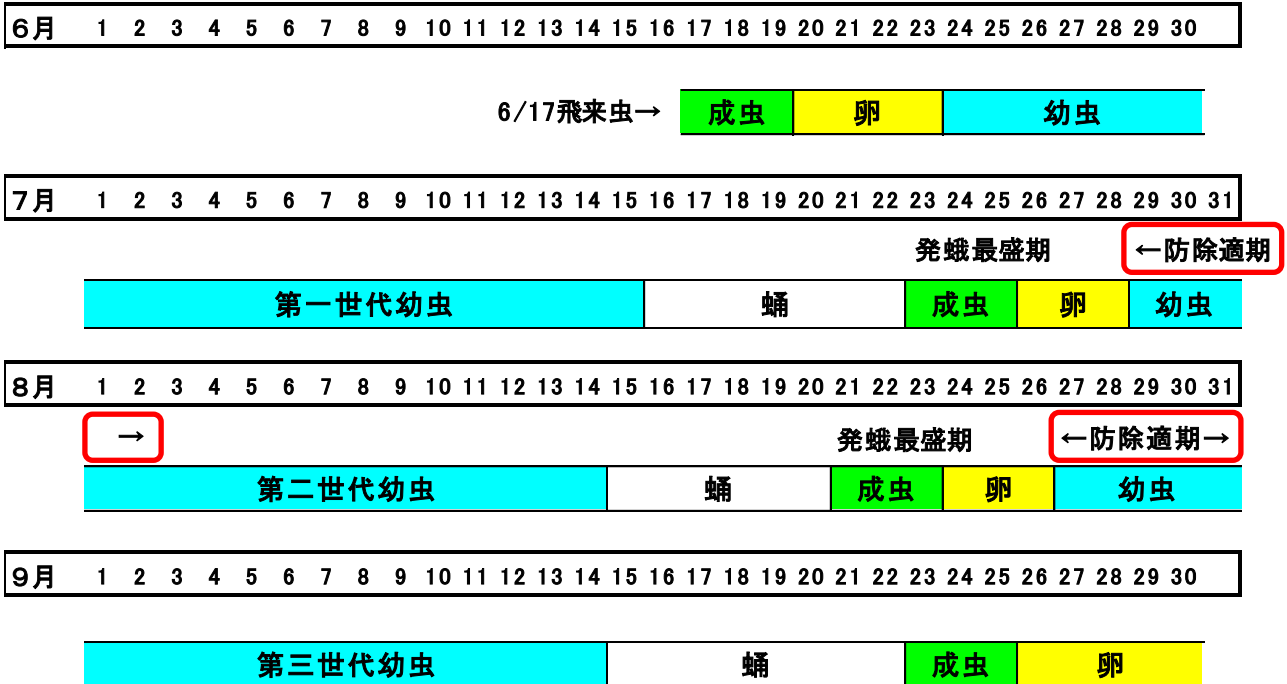


(注)

- (1) それぞれの飛来虫を起点として、有効積算温度と佐賀市川副町(農業試験研究センター内)の日最高気温及び日最低気温(7月23日までは今年のデータ、7月24日以降は平年値)を基に、その後の発生を予測した。
- (2) **防除適期は、幼虫ふ化揃い期である。**
- (3) 飛来量及び本田での増殖量は地域及び圃場ごとに異なるので、必ず各地域及び圃場ごとの発生状況を確認して防除を実施する。
- (4) 発生予想パターン第1版(7月14日作成)では、6月30日飛来の第2世代幼虫の発生始めは8月12日と予想した。7月23日までの気温で再計算した結果、7月14日以降の気温が平年より低く推移したため、今回の第2版での同幼虫の発生始めは、8月13日となっている。

図3 コブノメイガの発生予想パターン

(平成27年7月24日作成、佐賀県農業技術防除センター作成)



(注)

(1)6月17日の飛来虫を起点として、有効積算温度と佐賀市川副町(農業試験研究センター内)の日最高気温及び日最低気温(7月22日までは今年の実績、7月23日以降は平年値)を基に、その後の発生を予測した。

(2) 防除適期は、発蛾最盛期の7日後(幼虫ふ化揃い期)である。

(3) 飛来量及び本田での増殖量は地域及び圃場ごとに異なるので、必ず各地域及び圃場ごとの発生状況を確認して防除を実施する。

(4) 今後、新たな飛来波が加わる可能性もある。最新の飛来状況については、佐賀県農業技術防除センターのホームページ(<http://www.pref.saga.lg.jp/boujo.html>)における「海外飛来性害虫情報」を参照する。

果 樹

【概要】

作物名	病虫害名	発生量		病虫害防除 のてびきの 記載ページ	備 考
		平年比	前年比		
カンキツ	かいよう病	やや多	多	234～237	平成27年7月9日付病虫害 対策資料第8号 参照
	黒点病	やや多	並	232～234	平成27年7月9日付病虫害 対策資料第8号 参照
	ミカンハダニ	並	多	259～263	
	チャノキイロアザミウマ	並	やや多	252～259	
ナシ	ナシヒメソウカイ	並	並	314～317	
	ハダニ類	並	多	320～323	
ブドウ	べと病	やや多	多	344～346	平成27年7月9日付病虫害 発生予察注意報第3号 参照
	褐斑病	やや多	多	347～348	
果樹全般	カメムシ類	並	並	カンキツ：266～269 ナシ：318～319 ブドウ：360～361	平成27年7月24日付病虫害 対策資料第10号 参照

【特記事項】

【カンキツ】

- 黒点病防除では、マンゼブ剤散布後の積算降雨量が200mm～250mmに達した時点を次回の散布の目安とする。ただし、同雨量に達しない場合でも、散布後1ヶ月を目途に次回の散布を行う（[平成27年7月9日付病虫害対策資料第8号](#)参照）。
- チャノキイロアザミウマによる後期被害を防ぐために、8月中旬～9月上旬の防除を徹底する。特に発生源となるイヌマキ、サンゴジュ等を防風樹として植栽している園や、園内にチャ、ヒサカキ等の樹木が植栽されている園では注意する。
- 園内及び園周囲の雑草は、ミカンキイロアザミウマやハナアザミウマ類の発生源となるので、果実が着色する前までに除草作業を行う。
- 幼木園や夏期剪定を終えたハウスミカン園では、ミカンハモグリガ・アゲハ対策として10～14日毎に殺虫剤を散布する。ただし、薬剤抵抗性の発達を回避するために、異なる系統の殺虫剤を散布する。

【ナシ】

- 黒星病の発病葉や発病果実は他の果実や次年度の伝染源となるため除去し、園外で処分する。また、本病が多発生している圃場がみられているので、薬剤防除を徹底する（[平成27年7月9日付病虫害発生予察注意報第2号](#)参照）。
- 近年、夜蛾類による被害が増えているので、忌避灯を点灯する時間及び点灯時の園内の明るさに注意する。

3. 8月中下旬は炭疽病の急増期にあたるので、罹病性品種の「豊水」が植栽された園では、「幸水」の収穫終了後に殺菌剤を散布する。ただし、ストロビルリン剤については、耐性菌が発生しているため、「豊水」の収穫まで14日以上であれば、オーソサイド水和剤、オキシラン水和剤等の保護殺菌剤を用いる。収穫まで14日以内であれば、汚れが問題となるため、これらの薬剤は使用しない。

4. 果実が過熟になると輪紋病の発生が助長されるので、適期に収穫する。また、輪紋病の初期病斑は小さくてわかりにくいので、出荷時に箱内に混入しないよう注意する。

【ブドウ】

1. ベと病では、ストロビルリン系殺菌剤（アミスターフロアブル、ストロビードライフフロアブル等）については、耐性菌が発生しているため、本病の防除には使用しない。また、本病が多発生している圃場がみられているので、薬剤防除を徹底する（[平成27年7月9日付病害虫発生予察注意報第3号](#)参照）。

2. 黒とう病が発病した枝の剪除と巻きひげの処分を徹底する。また、県内一部地域で、本病が多発生している圃場がみられているので、薬剤防除を徹底する（[平成27年7月9日付病害虫発生予察注意報第4号](#)参照）。

3. 果実が過熟になると晩腐病の発生が助長されるので、適期に収穫する。

【果樹全般】

1. カメムシ類の飛来を把握するため、こまめに園内を見回り、飛来を確認した場合は早急に防除を行う（[平成27年7月24日付病害虫対策資料第10号](#)参照）。

2. 県内のヒノキ毬果の着果が少ない傾向にあることから、カメムシ類の果樹園への飛来時期が早くなる可能性があるため、今後の発生状況に注意する。

カンキツ

（巡回調査日：7月21～24日）



巡回調査時の生育状況

1. かいよう病

1) 予報の内容

発生量：**平年よりやや多い**（前年より多い）

2) 予報の根拠

(1)巡回調査では、温州みかんでの発生を認めていない。（発病葉率：平年0.5%、前年0%、発病果率：平年0%、前年0.1%）〈±〉

(2)巡回調査地点以外の圃場において、本病の発生を確認している。〈±～+〉

(3)気象予報では、並発生の条件となっている。〈±〉

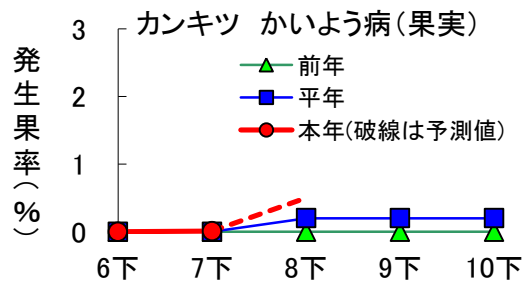
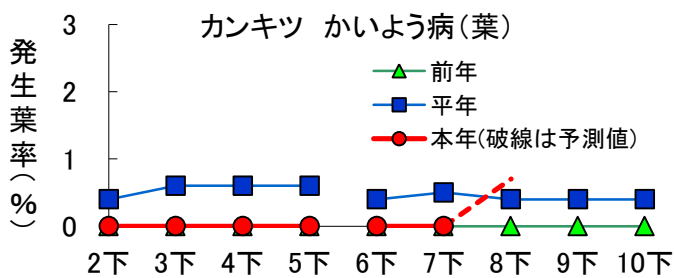
3) 防除上注意すべき事項

(1)本病が前年に発生した園や、風当たりが強い園、罹病性品種（ネーブル、いよかん、はるみ等）が植栽された園、新梢の伸長が遅くまで続く園（幼木園、高接園、隔年交互結実栽培園等）では、無機銅水和剤（クレフノン200倍加用）による防除を行う。散布間隔は20～25日とする。

(2)銅水和剤（クレフノン200倍加用）にマンゼブ水和剤を加用すると防除効果が低下するので控える。

(3)発病した枝や葉は今後の伝染源となるので除去する。ただし、強剪定すると枝が遅くまで伸長し、本病にかかりやすい期間が長くなるので行わない。

(4)台風の襲来が予想される場合は、襲来前までに必ず防除を行う。



注：5月下旬までは旧葉、6月以降は新葉を調査

2. 黒点病

1) 予報の内容

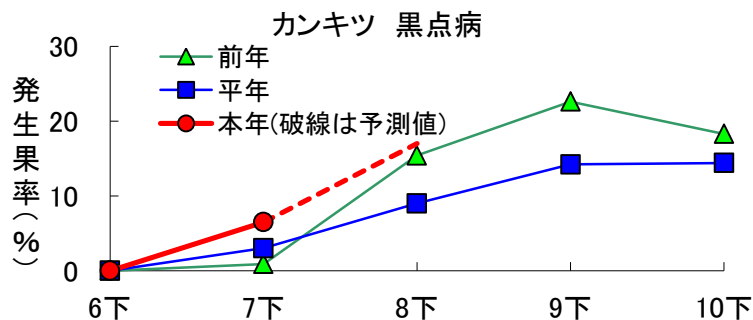
発生量：平年よりやや多い（前年並）

2) 予報の根拠

- (1) 巡回調査では、発生果率は6.5%（平年3.0%、前年0.9%）であり、平年及び前年よりやや多い。〈±〜+〉
- (2) 気象予報では、並発生の条件となっている。〈±〉

3) 防除上注意すべき事項

- (1) マンゼブ水和剤散布後の積算降雨量が200mm〜250mmに達した時点を次回の散布の目安とする。なお、同雨量に達しない場合でも、散布1ヵ月後を目安に次回の散布を行う。
- (2) 園内湿度を下げるために防風樹の剪定等を行い、通風をよくする。
- (3) 秋雨は発病を助長するので、8月中下旬の防除を徹底する。



3. ミカンハダニ

1) 予報の内容

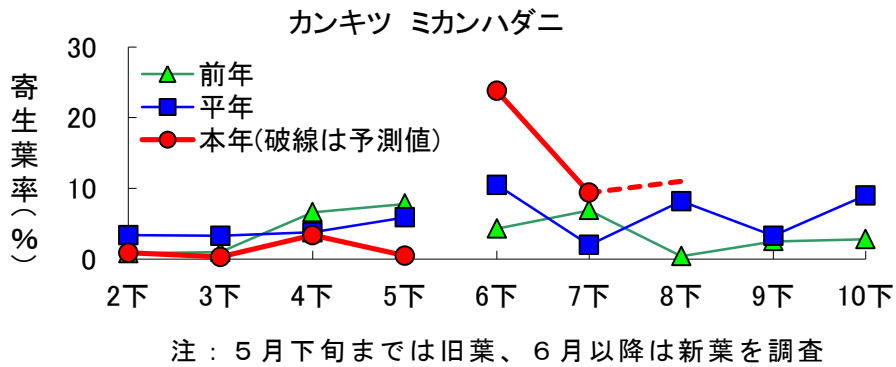
発生量：平年並（前年より多い）

2) 予報の根拠

- (1) 巡回調査では、寄生葉率は9.4%（平年2.0%、前年6.9%）であり、平年より多く前年よりやや多い。〈±〜+〉
- (2) 気象予報では、並発生の条件となっている。〈±〉

3) 防除上注意すべき事項

- (1) 殺ダニ剤に対する抵抗性の発達を避けるため、同じ種類の薬剤は年1回の使用とする。また、前年使用した殺ダニ剤は使用しない。
- (2) 低密度時（寄生葉率30%未満または1葉当たりの雌成虫の数が0.5〜1頭）に防除を行う。



4. チャノキイロアザミウマ

1) 予報の内容

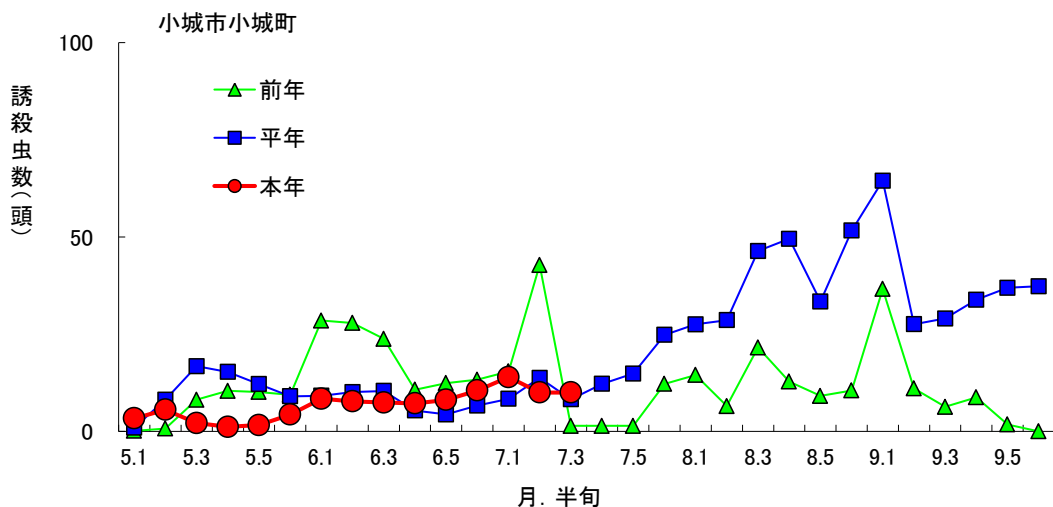
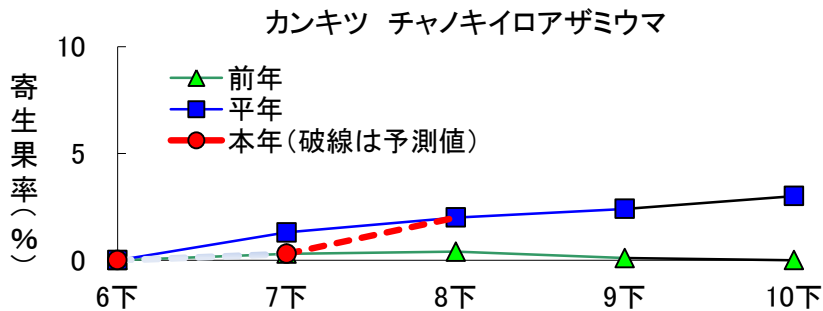
発生量：平年並（前年よりやや多い）

2) 予報の根拠

- (1) 巡回調査では、寄生果率は0.3%（平年1.3%、前年0.3%）であり、平年よりやや少なく前年並である。〈-~±〉
- (2) 小城市小城町の果樹試験場内に設置した黄色粘着トラップによる7月1半旬~7月3半旬の誘殺虫数は、平年並で推移している。〈±〉
- (3) 気象予報では、並発生の条件となっている。〈±〉

3) 防除上注意すべき事項

- (1) 後期被害を抑制するために、8月中旬~9月上旬の防除を徹底する。
- (2) イヌマキ、サンゴジュ等を防風樹として植栽している園や、園内にチャ、ヒサカキ等の樹木が植栽されている園では注意する。



黄色粘着板トラップによるチャノキイロアザミウマの誘殺虫数の推移

ナシ

(巡回調査日：7月21日)



巡回調査時の生育状況

1. ナシヒメシクイ

1) 予報の内容

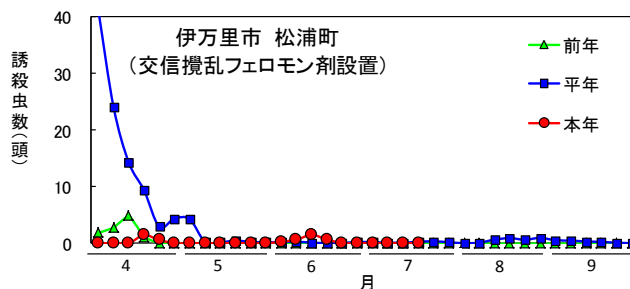
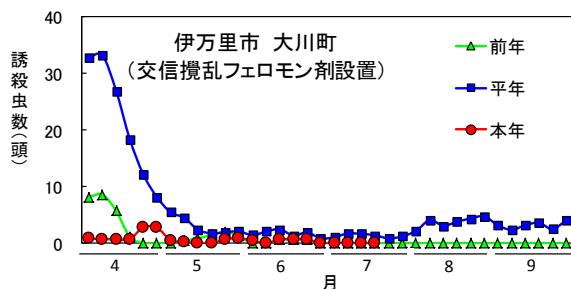
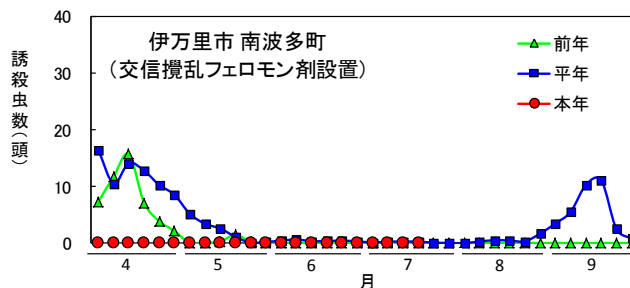
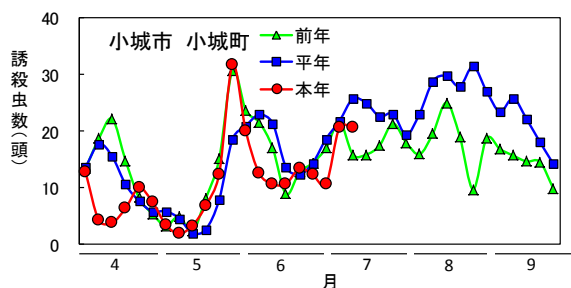
発生量：**平年並**（前年並）

2) 予報の根拠

- (1) フェロモントラップでの7月上中旬の誘殺数は、平年並で推移している。〈±〉
- (2) 気象予報では、並発生の条件となっている。〈±〉

3) 防除上注意すべき事項

- (1) 防除薬剤として、合成ピレスロイド剤やネオニコチノイド系剤を使用するが、ネオニコチノイド系剤については、ハマキムシ類に対する効果が劣るので注意する。
- (2) 晩生品種が混植または近接している園や団地では薬液の飛散を防止するとともに、使用する薬剤の選定（収穫前使用日数など）には十分に注意し、収穫まで7～10日毎に薬剤散布を行う（交信攪乱フェロモン資材設置園では10～14日間隔で薬剤散布を行う）。



フェロモントラップによるナシヒメシクイの誘殺推移
(小城市は果樹試験場、伊万里市は西松浦農業改良普及センター調査)

2. ハダニ類

1) 予報の内容

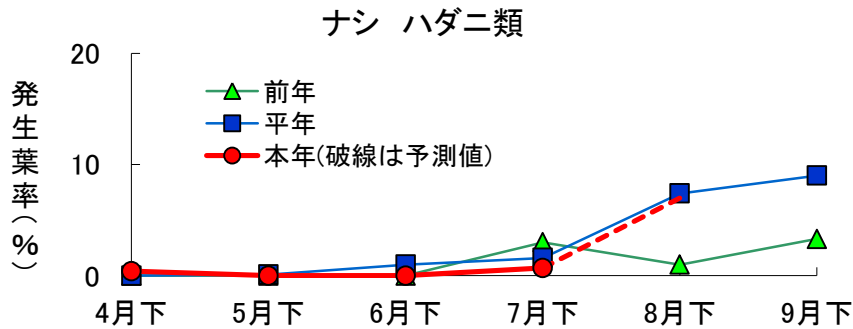
発生量：**平年並**（前年より多い）

2) 予報の根拠

- (1) 巡回調査では、発生葉率は0.7%（平年1.6%、前年0.3%）であり、平年よりやや少なく前年並である。〈-～±〉
- (2) 気象予報では、並発生の条件となっている。〈±〉

3) 防除上注意すべき事項

- (1) 殺ダニ剤に対する抵抗性の発達を避けるため、同じ種類の薬剤は年1回の使用とする。また、前年使用した殺ダニ剤は使用しない。
- (2) ハダニ類は高温乾燥で急増するので、低密度時（寄生葉率10%未満または1葉当たりの雌成虫数0.5頭以下）に防除を行う。



ブドウ

(巡回調査日：7月21日～22日)



巡回調査時の生育状況

1. ベと病

1) 予報の内容

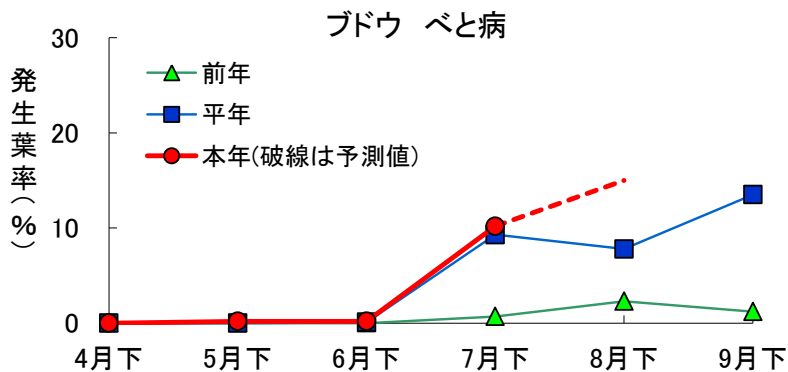
発生量：平年よりやや多い（前年より多い）

2) 予報の根拠

- (1) 巡回調査では、発生葉率は10.2%（平年9.3%、前年0.7%）であり、平年並で前年よりやや多い。また、多発生圃場も一部で認められる。〈±～+〉
- (2) 気象予報では、並発生の条件となっている。〈±〉

3) 防除上注意すべき事項

- (1) 降雨によって発病が進展するので、降雨前の予防散布を行う。
- (2) 罹病葉は、二次伝染源となるので必ず除去し、園外に持ち出して適切に処分する。
- (3) 防除効果を高めるために、棚面の上からも散布するよう心懸ける。
- (4) ストロビルリン系殺菌剤（アミスターフロアブル、ストロビードライフロアブル等）については、耐性菌が発生しているため、本病の防除には使用しない。
- (5) その他詳細については、[平成27年7月9日付病害虫発生予察注意報第3号](#)を参照する



2. 褐斑病

1) 予報の内容

発生量：平年よりやや多い（前年より多い）

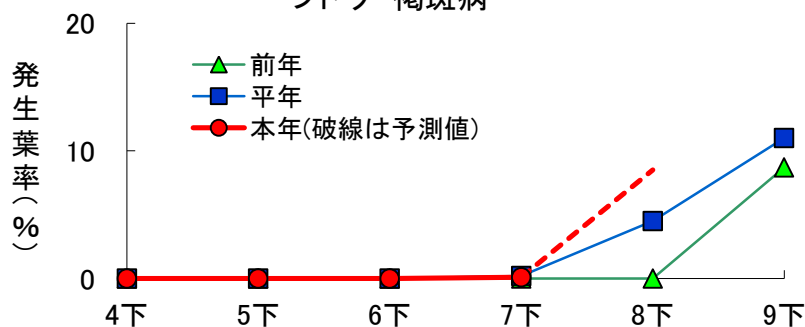
2) 予報の根拠

- (1) 巡回調査では、発生を認めていない（発生葉率：平年0.2%、前年0%）。〈±〉
- (2) 巡回調査地点以外で、本病の発生を確認している。〈±～+〉
- (3) 梅雨明けが平年より遅く、本病の感染に好適な条件で推移した。〈±～+〉
- (4) 気象予報では、並発生の条件となっている。〈±〉

3) 防除上注意すべき事項

- (1) 本病原菌は気孔から侵入するので、葉裏にも十分かかるよう丁寧に散布する。
- (2) 罹病葉は、二次伝染源となるので必ず除去し、園外に持ち出して適切に処分する。

ブドウ 褐斑病



果樹全般

1. カメムシ類

1) 予報の内容

発生量：平年並（前年並）

2) 予報の根拠

(1) 発生量

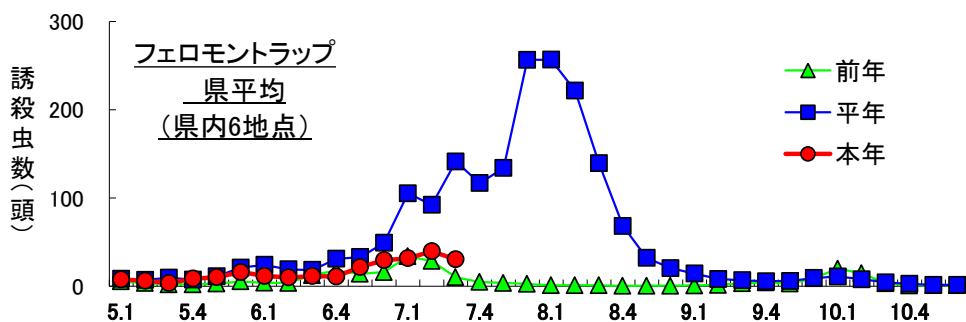
- ① フェロモントラップ（県内6地点、図1）及び予察灯（県内3地点、図2）による誘殺数は、平年よりやや少なく前年並で推移しているが、7月中旬の誘殺数が急増した地点がみられる。〈±〜+〉
- ② 7月下旬に行ったヒノキ毬果における寄生数調査では、1地点あたりの成幼虫数は7.6頭（平年12.7頭、前年10.6頭）で、平年及び前年よりやや少ない（表1）。〈-〜±〉
- ③ 県内各地で採集したヒノキ毬果における7月中下旬の平均口針鞘数は0.9本/果（平年1.8本、前年0.7本）で、平年よりやや少なく前年並である（表1）。〈-〜±〉
- ④ 気象予報では、並発生条件となっている。〈±〉

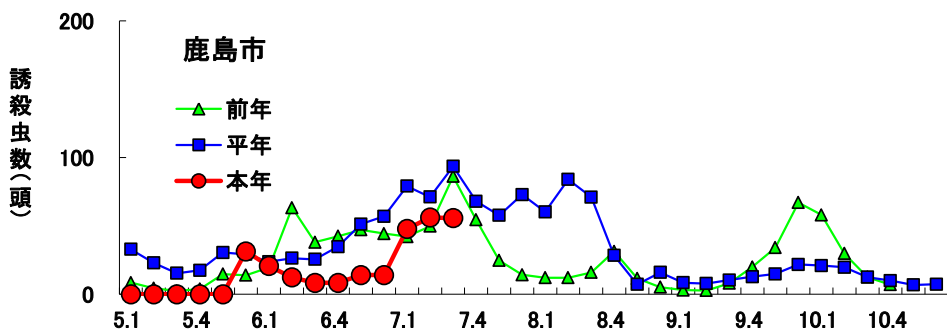
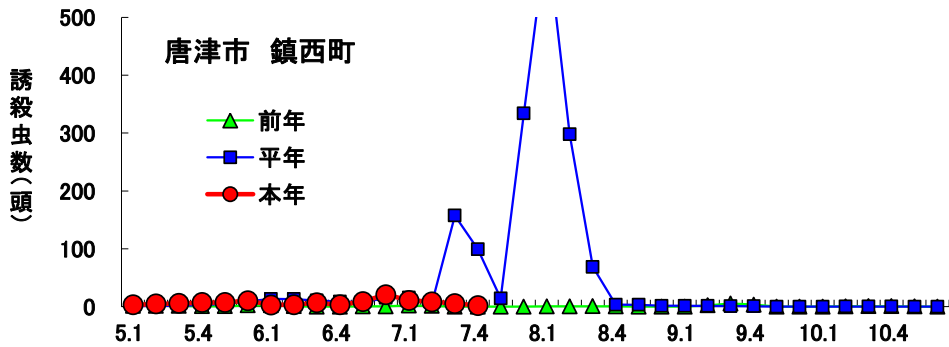
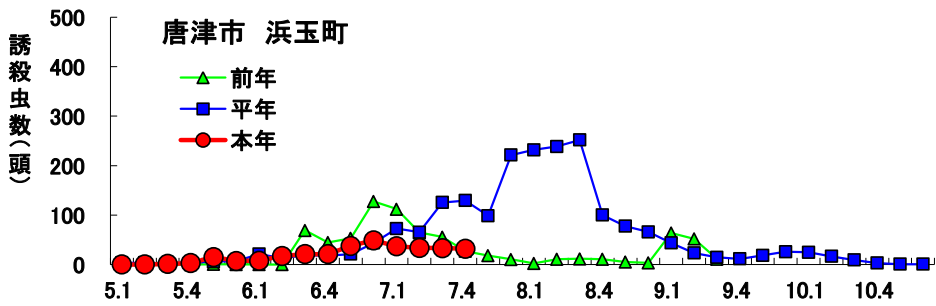
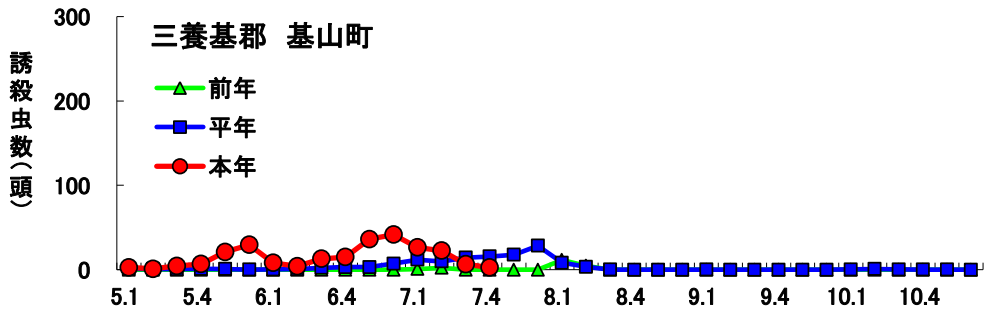
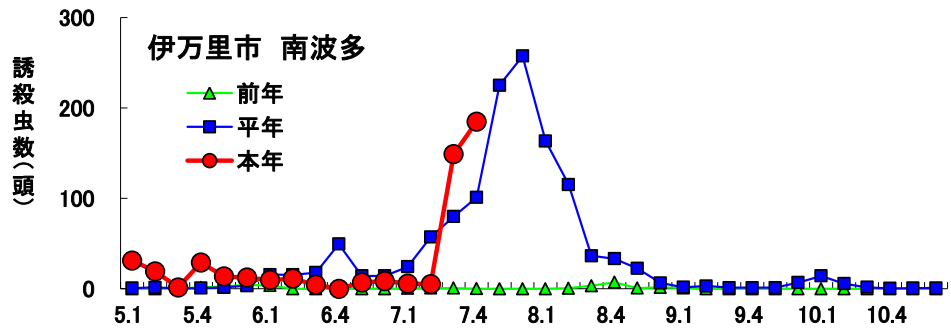
(2) 果樹園への飛来時期

- ① ヒノキ毬果における口針鞘数を基に算出した果樹カメムシ類新世代の果樹園への飛来時期は、概ね9月2～3半旬頃と予想される（表1）。
- ② カメムシ類はヒノキ毬果の種子を餌とする。調査地点におけるヒノキ毬果の着果程度は「極少～少」であることから、上記よりも飛来時期が早くなる可能性がある（表1）。

3) 防除上注意すべき事項

- (1) こまめに園内を見て回り、飛来を確認した場合は早急に防除を行う。
- (2) 果樹カメムシ類は樹高の高い樹木に一度飛来して、その後果樹園に飛来する傾向があるので、防風樹等は必要以上に高くないように剪除する。
- (3) 合成ピレスロイド剤等を散布するとハダニ類やカイガラムシ類の異常増殖（リサーチエンス）を生じる場合があるので、これらの害虫の防除対策も実施する。
- (4) 県内各調査地点における誘殺状況の推移については、佐賀県農業技術防除センターHPの「[病害虫データ情報](#)」を参照する。
- (5) その他詳細については、[平成27年7月24日付病害虫対策資料第10号](#)を参照する。





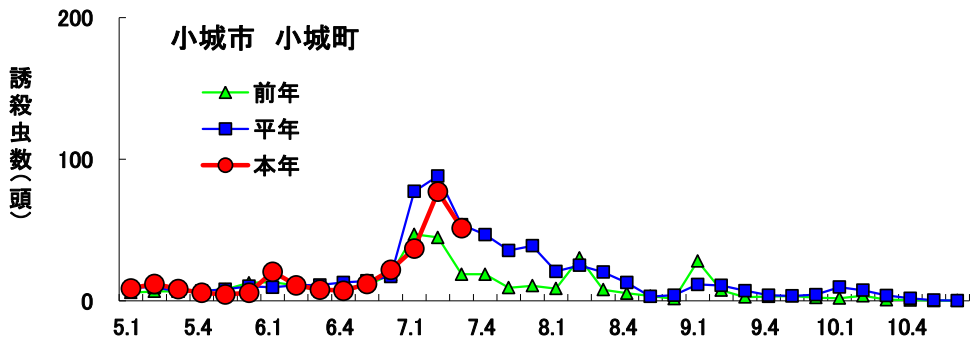


図1 フェロモントラップによる果樹カメムシ類の誘殺推移

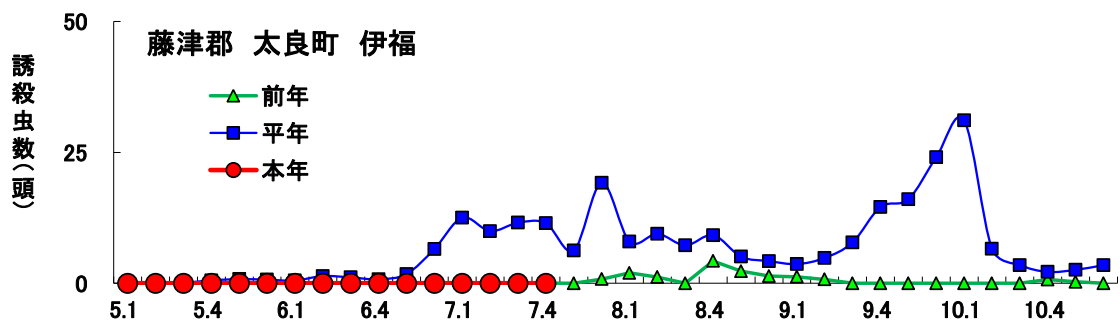
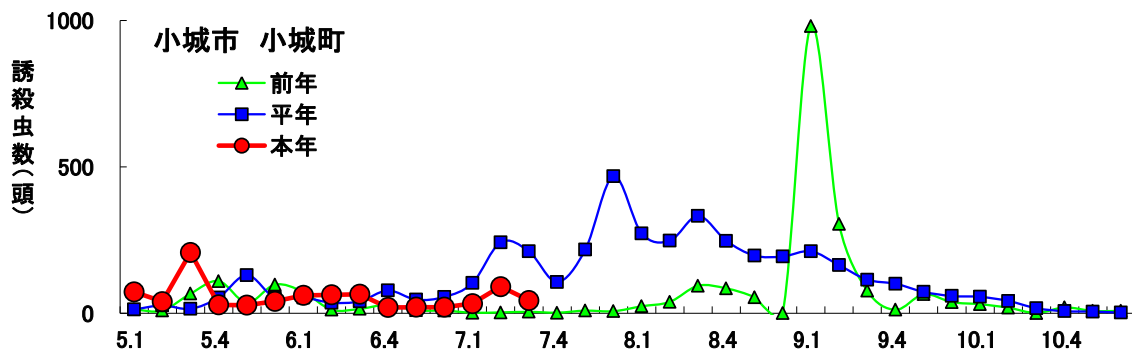
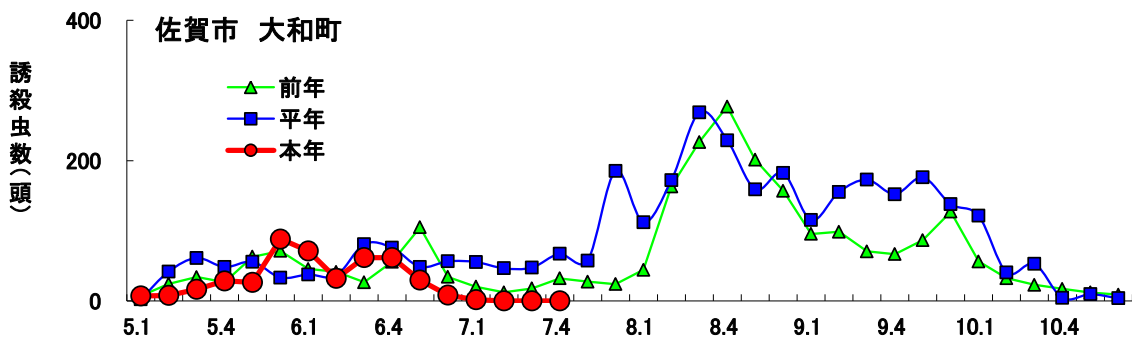
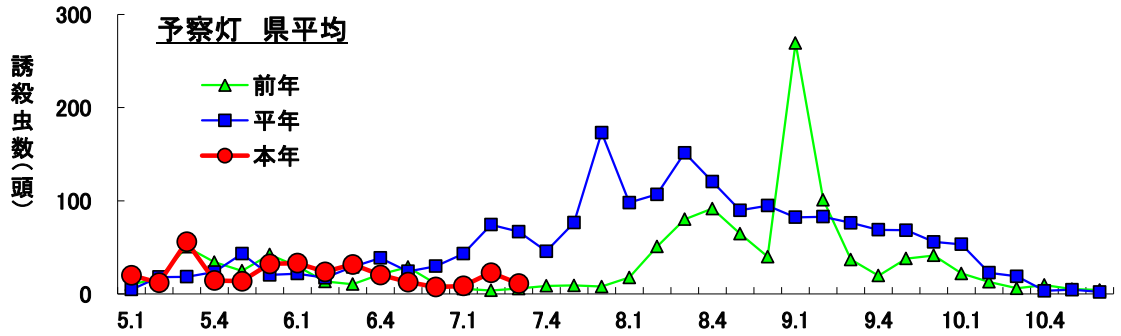


図2 予察灯による果樹カメムシ類の誘殺推移

表1 ヒノキ毬果における果樹カメムシ類寄生虫数及び口針鞘数

No.	調査地	ヒノキ毬果における寄生状況			離脱予想時期 (各調査日から算出)	口針鞘数 7月下旬	ヒノキ毬果 ²⁾ 着果程度
		成虫 ¹⁾	幼虫	合計			
1	上峰町	3	0	3	9月3半旬頃～	0.5	やや少
2	神埼市	0	0	0	9月4半旬頃～	0.0	やや少
3	小城市	3	1	4	9月2半旬頃～	1.8	少
4	多久市	-	-	-	-	-	極少
5	唐津市1	-	-	-	-	-	極少
6	唐津市2	4	19	23	9月2半旬頃～	1.1	少
7	伊万里市1	-	-	-	-	-	極少
8	伊万里市2	5	1	6	9月2半旬頃～	0.7	少
9	伊万里市3	-	-	-	-	-	極少
10	白石町	3	3	6	9月3半旬頃～	0.1	少
11	鹿島市1	3	0	3	9月3半旬頃～	0.2	少
12	鹿島市2	-	-	-	-	-	極少
13	鹿島市3	-	-	-	-	-	極少
14	太良町1	2	14	16	9月1半旬頃～	3.0	少
15	太良町2	-	-	-	-	-	極少
	平均	2.9	4.8	7.6	9月2半旬頃～	0.9	少
	平年	-	-	12.7	-	1.8	
	前年(H26年)	-	-	10.6	-	0.7	やや多

1)チャバネアオカメムシの寄生が主であった。

2)ヒノキ毬果着果程度:福岡総農試の達観調査法(一部改変)に基づいて調査

- ・極少:ほとんど結実が見あたらない
- ・少:梢頭部にわずかに結実
- ・やや少:梢頭部から中央部周辺にかけて結実した樹と梢頭部にわずかに結実した樹が混在
- ・中:梢頭部から中央部付近にかけて結実
- ・やや多:梢頭部から最下部にかけて全面的に結実した樹と全面的に結実しない樹が混在
- ・多:梢頭部から最下部にかけて全面的に結実
- ・極多:梢頭部から最下部にかけて全面的にブドウ状に結実

茶

【概要】

作物名	病害虫名	発 生 量		病害虫防除 のてびきの 記載ページ	備考
		平年比	前年比		
茶	炭疽病	並	並	411～412	
	輪斑病	やや多	並	412～413	
	カンザワハダニ	並	並	418～419	平成27年5月 28日付病害虫 対策資料第6 号参照
	クワシロカイガラムシ	並	並	427～428	
	チャノミドリヒメヨコバイ	並	並	423～424	
	チャノキイロアザミウマ	やや少	並	425～426	
	チャノコカクモンハマキ	並	やや多	421～423	
	チャノホソガ	並	やや多	420～421	

【特記事項】

1. チャノキイロアザミウマ、チャノミドリヒメヨコバイは、今後秋にかけて発生が増えるため、萌芽期～開葉初期の防除を行う。多発生園では、一週間後を目安に追加防除を行う。
2. チャノコカクモンハマキは、8月上～中旬が重点防除時期である。葉がつづられると防除効果があがりにくいため、適期（発蛾最盛期から7～10日後）に防除を行う。
3. 輪斑病は、高温期に発生が多く、整枝時の傷口から感染しやすいため、整枝後は直ちに防除を行う。
4. もち病は、本年二番茶で発生が多くみられたため、秋芽生育初期の防除を行う。多発が予想される場合は、4～5葉期頃までに2～3回の散布を行う。
5. 県内において、チャトゲコナジラミの発生が確認されている。既発生地においては防除を徹底するとともに、未発生地において疑わしい葉が見つかった場合には、すぐに関係機関へ連絡する。防除対策は、ホームページ掲載の「[チャトゲコナジラミの防除対策](#)」を参照する。

茶

（巡回調査：7月21～23日）

1. 炭疽病

1) 予報の内容

発生量：平年並（前年並）

2) 予報の根拠

(1) 巡回調査では、1m²あたりの発病葉数は6.7枚（平年5.3枚、前年0.1枚）であり、平年並で前年より多い。〈±〉

(2) 気象予報では並発生の条件となっている。〈±〉

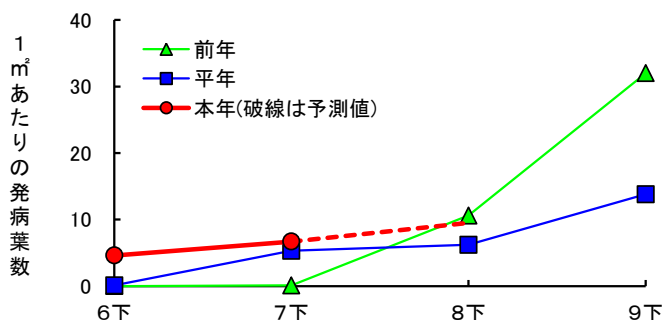
3) 防除上注意すべき事項

(1) 発生園は整枝により罹病葉を除去し、日当たり及び通風をよくする。



巡回調査時の生育状況

チャ 炭疽病



2. 輪斑病

1) 予報の内容

発生量：平年よりやや多い（前年並）

2) 予報の根拠

(1) 巡回調査では、1 m²あたりの発病葉数は2.2枚（平年1.0枚、前年4.6枚）であり、平年よりやや多く前年より少ない。〈±〜+〉

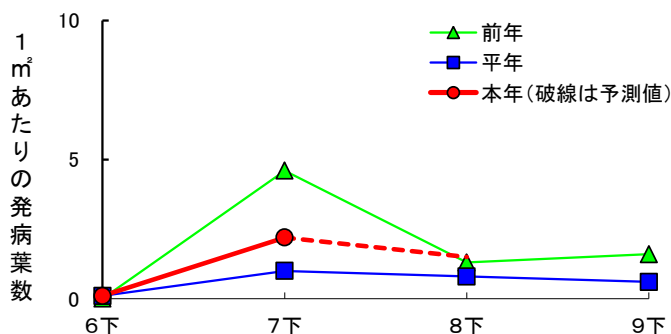
(2) 気象予報では、並発生の条件となっている。〈±〉

3) 防除上注意すべき事項

(1) 整枝時の傷口から感染するため、摘採後直ちに防除を行う。

(2) 二番茶摘採後に多発した場合は、剪枝により病斑部を除去する。

チャ 輪斑病



3. カンザワハダニ

1) 予報の内容

発生量：平年並（前年並）

2) 予報の根拠

(1) 巡回調査では、寄生葉率は0.3%（平年0.6%、前年0.9%）であり、平年並で前年よりやや少ない。〈±〉

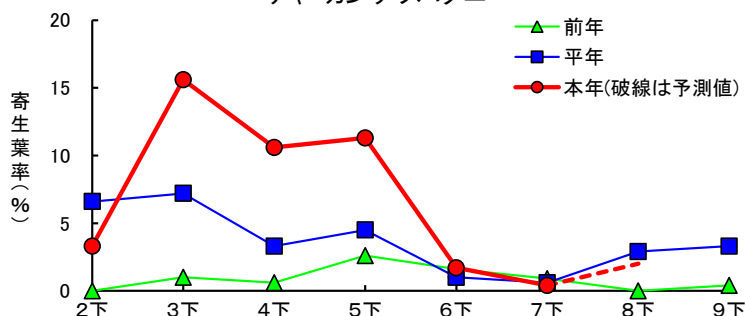
(2) 気象予報では並発生の条件となっている。〈±〉

3) 防除上注意すべき事項

(1) 生息部位である葉裏にも薬液が十分にかかるように丁寧に散布する。

(2) 薬剤感受性の低下を防ぐため、同一薬剤は年一回の使用とする。

チャ カンザワハダニ



4. チャノミドリヒメヨコバイ

1) 予報の内容

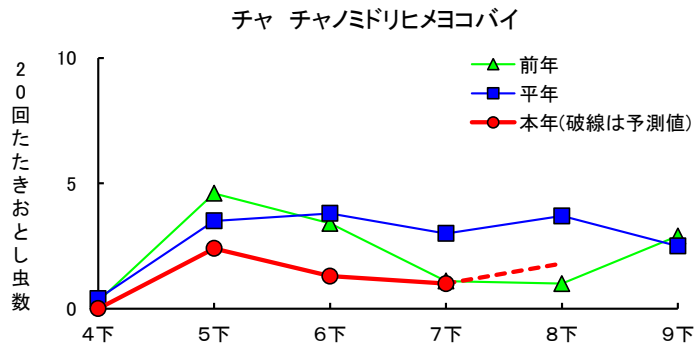
発生量：平年並（前年並）

2) 予報の根拠

- (1) 巡回調査では、20回たたき落とし虫数は1.0頭（平年3.0頭、前年1.1頭）であり、平年よりやや少なく前年並である。（-～±）
- (2) 気象予報では並発生の条件となっている。（±）

3) 防除上注意すべき事項

- (1) 幼虫は葉裏に生息することが多いので、葉裏にも薬液が十分にかかるよう丁寧に散布する。



5. チャノキイロアザミウマ

1) 予報の内容

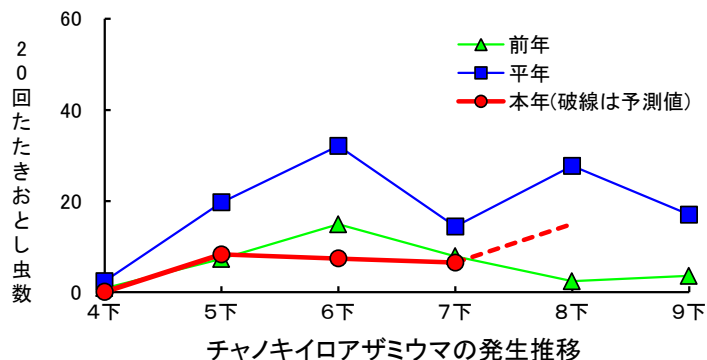
発生量：平年よりやや少ない（前年並）

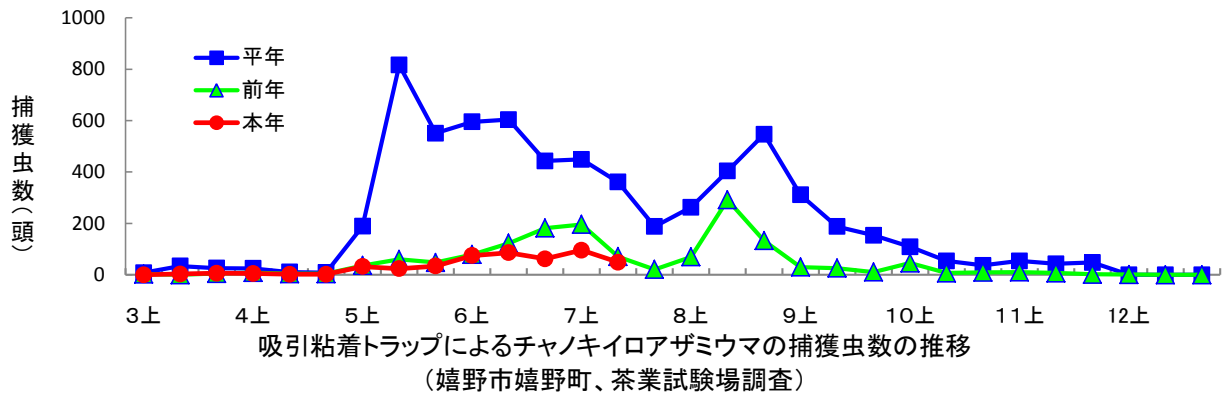
2) 予報の根拠

- (1) 巡回調査では、20回たたき落とし虫数は6.5頭（平年14.4頭、前年7.9頭）であり、平年よりやや少なく前年並である。（-～±）
- (2) 吸引粘着トラップによる誘殺虫数は、6月下旬が62頭（平年443頭、前年182頭）、7月上旬が96頭（平年449頭、前年196頭）、7月中旬が49頭（平年361頭、前年71頭）と平年よりやや少なく前年並で推移している。（-～±）
- (3) 気象予報では並発生の条件となっている。（±）

3) 防除上注意すべき事項

- (1) 幼虫は葉裏に生息することが多いので、葉裏にも薬液が十分にかかるよう丁寧に散布する。
- (2) 薬剤感受性の低下を防ぐため、同一系統の薬剤を連用しない。





6. チャノココクモンハマキ

1) 予報の内容

発生量：平年並（前年よりやや多い）

2) 予報の根拠

(1) 巡回調査では、1 m²あたりの被害葉数は2.5枚（平年2.5枚、前年0.3枚）であり、平年並で前年よりやや多い。〈±〉

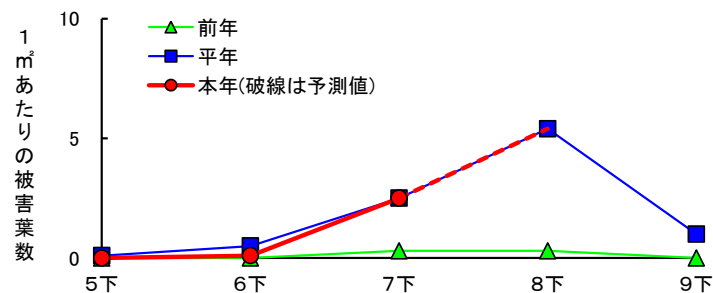
(2) 気象予報では並発生の条件となっている。〈±〉

3) 防除上注意すべき事項

(1) 8月上～中旬は本虫の重点防除時期である。

(2) 葉がつづられると防除効果があがりにくいため、各地区に設置したトラップ情報等を参考にしながら、適期（発蛾最盛期から7～10日後）に防除を行う。

チャ チャノココクモンハマキ



野 菜

【概要】

作物名	病害虫名	8月の 予想発生量		病害虫防除の てびき記載頁	備考
		平年比	前年比		
イチゴ (育苗圃)	うどんこ病	やや少	少	188～191	平成27年4月30日付病害虫対策資料第3号参照
	苗立枯症	並	並	193～198	平成27年4月30日付病害虫対策資料第3号参照
	ハダニ類	少	少	199～200	平成27年5月28日付病害虫対策資料第7号参照
	アブラムシ類	並	並	204～205	
アスパラ ガス	茎枯病	やや多	やや多	298～299	
	褐斑病	並	並	299～300	
	斑点病	並	並	299	
	アザミウマ類	並	並	301～302	
	ハダニ類	並	やや少	302	

【特記事項】

【イチゴ】

1) うどんこ病

本病菌は、夏季にもイチゴ苗上に生存し伝染するため、8月も薬剤防除を継続し上位葉への伝染を抑制する。（[平成27年4月30日付病害虫対策資料第3号参照](#)）。

2) 苗立枯症（炭疽病、萎黄病、疫病）

親株床で発生がみられた圃場では、苗でも再発生し被害が拡大する場合が多い。そのため、薬剤防除を定期的を実施するとともに、発病株は見つけ次第、早期に除去する。また、感染親株からの病原菌の伝染を抑えるため、ランナー切り離し後は親株を早期に撤去する。（[平成27年4月30日付病害虫対策資料第3号参照](#)）。

3) ハダニ類

苗による本圃への持ち込みを防ぐため、適宜、摘葉を行うとともに、薬剤防除を徹底する。（[平成27年5月28日付病害虫対策資料第7号参照](#)）

【果菜類（ナス、キュウリ、トマト等）】

1) コナジラミ類、アザミウマ類

苗による本圃への持ち込みを防ぐため、育苗時の防除を徹底する。

【タマネギ】

1) 苗床の土壌消毒

苗での苗立枯病の発生やべと病菌の感染を防ぐため、苗床は未発病圃場を利用するか、または土壌消毒を確実に実施する。

イチゴ（育苗圃）

（巡回調査：7月21日～22日）



巡回調査時の生育状況

1. うどんこ病

1) 予報の内容

発生量：平年よりやや少ない（前年より少ない）

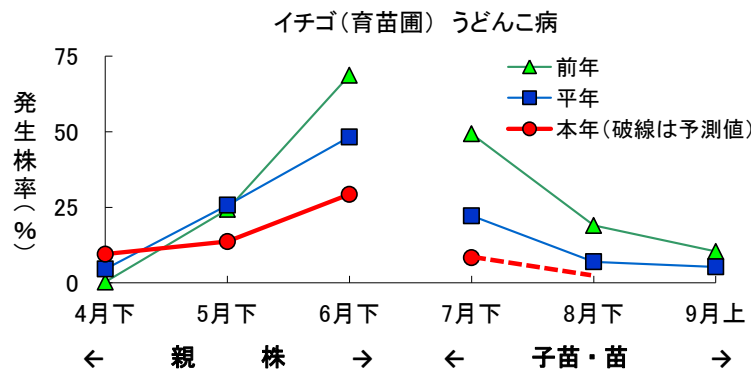
2) 予報の根拠

(1)巡回調査では、発生株率は8.3%（平年22.2%、前年49.3%）であり、平年よりやや少なく、前年より少ない。〈-～±〉

(2)気象予報は、並発生の条件となっている。〈±〉

3) 防除上注意すべき事項

(1)特記事項及び[平成27年4月30日付病害虫対策資料第3号](#)を参照。



2. 苗立枯症（炭疽病・疫病）

1) 予報の内容

発生量：平年並（前年並）

2) 予報の根拠

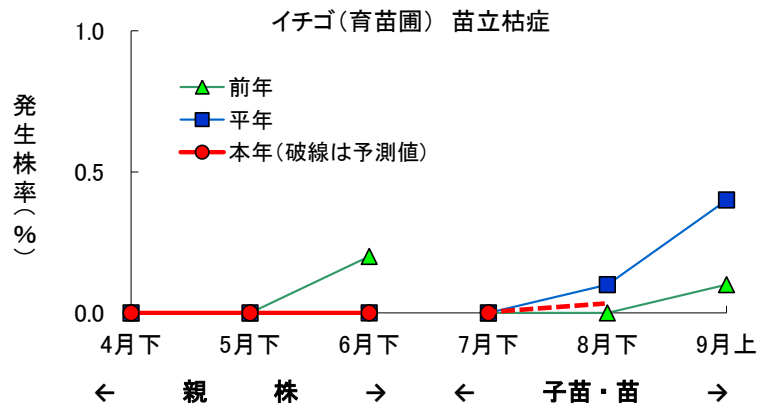
(1)巡回調査では、発生を認めていない（発生株率：平年0%、前年0%）。〈±〉

(2)気象予報では、並発生の条件となっている。〈±〉

3) 防除上注意すべき事項

(1)発病株はすみやかに圃場外へ持ち出し、適切に処分する。

(2)詳細な防除対策は[平成27年4月30日付病害虫対策資料第3号](#)を参照する。



3. ハダニ類

1) 予報の内容

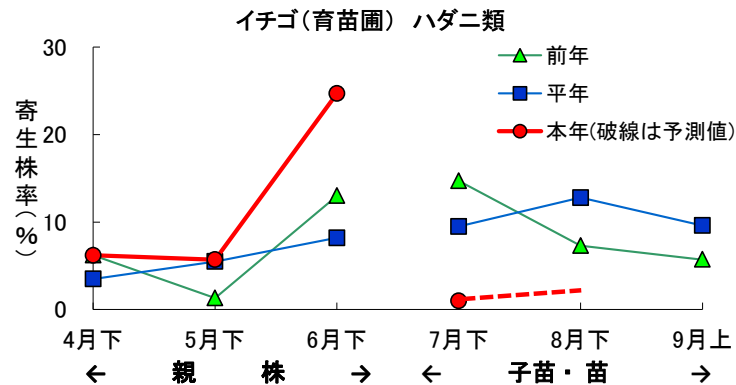
発生量：平年より少ない（前年より少ない）

2) 予報の根拠

- (1) 巡回調査では、寄生株率は1.0%（平年9.5%、前年14.7%）であり、平年よりやや少なく前年より少ない。〈-〜±〉
- (2) 気象予報では、並発生の条件となっている。〈±〉

3) 防除上注意すべき事項

- (1) 薬剤散布時には、薬液が葉裏にむらなく付着するよう、丁寧に散布する。
- (2) 薬剤感受性の低下を防ぐため、育苗期～本圃期間を通じ、同一系統薬剤の使用回数をできるだけ抑える。



アスパラガス

(巡回調査：7月21日～22日)



巡回調査時の生育状況

1. 茎枯病

1) 予報の内容

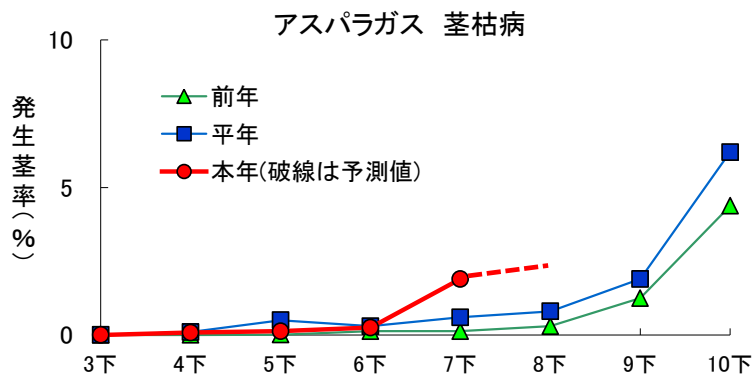
発生量：平年よりやや多い（前年よりやや多い）

2) 予報の根拠

- (1) 巡回調査では、発生株率は1.9%（平年0.6%、前年0.1%）であり、平年及び前年より多い。〈+〉
- (2) 気象予報では、並発生の条件となっている。〈±〉

3) 防除上注意すべき事項

- (1) 雨の降り込みを防ぐため、強い雨風の際はサイドビニルを下ろす。



2. 褐斑病

1) 予報の内容

発生量：平年並（前年並）

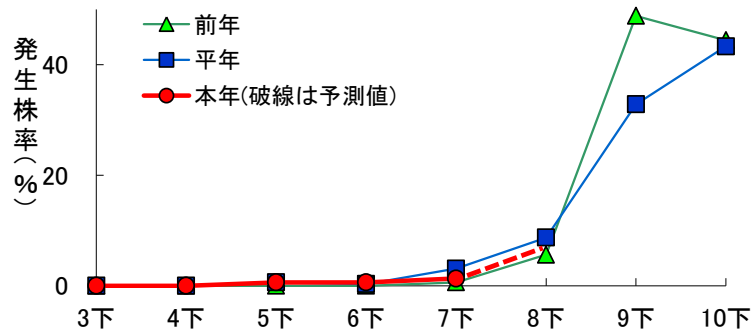
2) 予報の根拠

- (1) 巡回調査では、発生株率は1.3%（平年3.1%、前年0.6%）であり、平年よりやや少なく前年並である。〈-~±〉
- (2) 気象予報では、並発生の条件となっている。〈±〉

3) 防除上注意すべき事項

- (1) 8月以降に発生が拡大するため、初発生時から防除を行う。
- (2) 本病は高湿度条件で進展するため、圃場内の通風を図る。

アスパラガス 褐斑病



5. 全国・佐賀県で多発生している病害虫及び新たに発生した病害虫

主に6月24日～7月24日までに発表されたもの

警報・注意報（重要な病害虫の多発生が予想され、早めに防除する必要があるときに発表）				
発信元	内容	日付	作物	病害虫名
富山県	注意報	2015/6/24	水稲	斑点米カメムシ類
奈良県	注意報	2015/6/29	カンキツ類	ミカンハダニ
福井県	注意報	2015/6/30	水稲	斑点米カメムシ類
岩手県	注意報	2015/6/30	ネギ	ネギアザミウマ、ネギハモグリバエ
香川県	注意報	2015/6/30	イチゴ	うどんこ病
福島県	注意報	2015/6/30	水稲	斑点米カメムシ類
新潟県	注意報	2015/7/1	水稲	斑点米カメムシ類
高知県	注意報	2015/7/1	水稲	いもち病
愛知県	注意報	2015/7/3	ナシ	黒星病
宮城県	注意報	2015/7/3	水稲	斑点米カメムシ類
大分県	注意報	2015/7/8	普通期水稲	いもち病
石川県	注意報	2015/7/8	水稲	斑点米カメムシ類
埼玉県	注意報	2015/7/9	水稲	いもち病
山形県	注意報	2015/7/9	水稲	斑点米カメムシ類
佐賀県	注意報	2015/7/9	ブドウ	黒とう病
佐賀県	注意報	2015/7/9	ブドウ	べと病
佐賀県	注意報	2015/7/9	ナシ	黒星病
北海道	注意報	2015/7/13	バレイショ	疫病
大阪府	注意報	2015/7/15	ブドウ	べと病
島根県	注意報	2015/7/17	水稲	斑点米カメムシ類
山形県	注意報	2015/7/23	水稲	斑点米カメムシ類
佐賀県	注意報	2015/7/23	水稲	いもち病
福岡県	注意報	2015/7/24	水稲	いもち病

注：太字は九州地方で発表されたものを示す

特殊報（新たな病害虫が発生した時などに発表される）			
発信元	日付	作物	内容
宮城県	2015/6/23	レンゲ	アルファルファダンゴゾウムシ
京都府	2015/6/26	トウガラシ	えそ輪点病（CSNV）
岐阜県	2015/7/3	ウメ	輪紋病（PPV）
栃木県	2015/7/9	イチゴ	ミカンコナカイガラムシ
和歌山県	2015/7/13	ニンジン	斑点細菌病
大阪府	2015/7/17	キク	茎えそ病（CSNV）

注：太字は九州地方で発表されたものを示す

技術情報等（九州地方で発表されたもののみ）			
発信元	日付	作物	内容
長崎県	2015/7/1	イチゴ	炭疽病の防除対策
長崎県	2015/7/1	早期水稲	いもち病（穂いもち）の防除対策
福岡県	2015/7/1	イチゴ	うどんこ病及び炭疽病の発生状況
大分県	2015/7/1	野菜類	灰色かび病、べと病、すすかび病
大分県	2015/7/1	果樹	果樹カメムシ類の発生動向
熊本県	2015/7/2	水稲	海外飛来性害虫の飛来状況
熊本県	2015/7/2	早期・早植え水稲	いもち病の発生状況
佐賀県	2015/7/9	作物全般	長雨・日照不足にかかる病害防除対策
鹿児島県	2015/7/13	普通期水稲	海外飛来性害虫の飛来状況
佐賀県	2015/7/14	水稲	トビイロウンカの発生予想
長崎県	2015/7/15	水稲	トビイロウンカ、コブノメイガの防除対策
鹿児島県	2015/7/21	サツマイモ	ナカジロシタバの発生状況について

注：太字は佐賀県で発表されたものを示す

6月1日～8月31日の3か月間は農薬危害防止運動期間です。農薬の安全かつ適正な使用及び保管管理を徹底しましょう。

◎農薬散布後の止水期間は7日間です。水田用除草剤や本田粒剤の処理後7日間は落水やかけ流しをしないようにしましょう。

◎農薬の登録内容は変更されることがあります。

使い慣れた農薬でも、ラベル等で登録内容を確認しましょう。

もう一度確認!
その使い方で大丈夫?

農薬の保管は適切に
容器の移し替えは誤用のもと。

農業保管庫
必ず施錠

周辺環境への配慮を
土壌くん蒸後はしっかり被覆。

防護装備を正しく着用
マスク・保護メガネ・防除衣の3点を着用。

ラベルの確認も
忘れずに!

平成27年度農薬危害防止運動
農林水産省・厚生労働省・環境省・都道府県共催

農薬危害防止運動 検索